

シェイクスピアの研究

中野春夫

当該年度(2017年4月～2018年3月)に終刊を迎えた文学関連の大学紀要あるいは研究会機関誌がいくつかあったようである。英文学に限っても二つの雑誌が「終刊記念号」を銘打っていて、そのタイトルが目に入ってきた時は文学研究をめぐる環境の大きな変化を改めて実感させられた。大学組織改編の影響云々について今さら愚痴っても仕方がないので、この場を借りてお願いを一つ。初期近代イングランド(イギリス)演劇研究は英文学のみならず文学研究そのものを引っ張ってきた領域でありますので、皆様方には何かしらの媒体でこれまで以上に研究成果をご発表いただき、若い世代にこの研究領域の魅力を伝え続けて下されば嬉しい限りです。書評の数がどれだけ増えても評者は労を厭いません。

シェイクスピア没後400年の2016年度はシェイクスピア関連の成果に関し質量ともに群を抜いて豊穡の年だった。物事の理として翌年に反動が来るのは致し方なく、論文の本数は二、三割程度減っている。ただし単著や審査付き論文のレベルは昨年度と同様の高水準であり、むしろ女性表象や女性史研究に関わる先駆的な成果を生み出したという点では例年以上に生産的な一年だった。

まずは出版順に単著の紹介から(出版順)。安達まみ『イギリス演劇における修道女像——宗教改革からシェイクスピアまで』(岩波書店、2017年11月)は宗教改革後のイングランド社会において修道女のイメージが歴史・文学・演劇の領域で拡散、発展していく過程をたどった画期的な成果である。本書によって明らかになるのは、宗教改革後に修道女が消滅したにもかかわらず、「敬虔／ふしだら」という両義的な「修道女」言説が現実世界でも演劇世界でもイングランド社会における宗教的記憶の受け皿として機能し続けた事実である。本書は二部構成で、その第一部はジョン・フォックスの『迫害の実録』やホリンシェッド年代記、さらにはジョン・ストウの『ロンドン概観』など16世紀の重要な一次資料を次々と修道女表象という視点から読み解き、演劇で応用される「修道女」イメージの重層的な構造を圧倒的な量のデータに基づいて検証する。第二部第三章で指摘されるシェイクスピア劇の修道女表象はシェイクスピア研究者にとっては絶対不可欠な情報であり、著者がいなければイングランドの修道女というテーマは永遠に忘れ去られることになったはずである。女性表象史研究書としても重要。

北村紗衣『シェイクスピア劇を楽しんだ女性たち——近世の観劇と読書』(白水社、2018年3月)はシェイクスピア劇受容において文化的にも娯楽産業的にも女性が観客

シェイクスピアの研究

および読者として大きな役割をはたしてきたことを示す意欲作である。本書は三部から構成され、第一部はシェイクスピア時代から清教徒革命期までを扱い、シェイクスピア劇をリアルタイムで見ていた可能性のある女性、ファーストフォリオを所蔵していた女性の紹介を行う。宮内大臣一座(国王一座)がビジネス戦略上女性観客の嗜好も意識していたことを、エピログ等のテキスト分析や同時代の断片的な資料を組み合わせ指摘する過程がみごと。第二部と第三部は「シェイクスピア崇拜」が生まれる王政復古期以降の時期を対象とし、シェイクスピアを縦横無尽に引用する女性詩人や作家、シェイクスピア上演の劇評を執筆する小説家など、娯楽文化におけるシェイクスピアの拡散に大きく貢献した女性たちを紹介してくれる。第三部での「シェイクスピア・レディース・クラブ」やシェイクスピア・ジュビリー祭(1769年)の情報は有益で面白い。

日本シェイクスピア協会の機関誌 *Shakespeare Journal*, Vol.4 は「本文研究の現在」の特集を組み、以下の2本の論考を収めている。廣田篤彦『『ハムレット』のヘキュバ——“The mobled / inobled queen”』は『ハムレット』第2幕第2場において旅回り役者が朗誦するプライアム王殺害場面の台詞に焦点を合わせ、Fのヘキュバ表象およびハムレットの反応がQ1やQ2とは異なる現象を精緻な分析で実証する。本文研究が作品分析とどのように融合しうるかを示す一つの例として魅力的である。太田一昭『『二重の欺瞞』の作者同定と文体統計解析』はシェイクスピアの筆を文体統計解析でどの程度まで客観的に証明できるかを問い直す論考。ルイス・ティボルドの偽造作と見なされてきた『二重の欺瞞』が近年では文体統計解析によってシェイクスピアの筆を認められる傾向が強まる中、本論はその文体統計解析そのものを検討し直し、共作論の根拠を次々と覆していく。論点が明晰で論の展開も爽快。

Shakespeare Journal は特集企画論文以外に一般の投稿論文も公募しており、今回は以下の三点が収録されている。塚田雄一「エリザベス表象研究の可能性を探る——初期近代イギリス演劇と批評理論の接点」は従来のエリザベス表象研究を網羅的に取り上げ、それぞれの強みと問題点を分かりやすく解説してくれる。佐藤達郎『『エイジャックスの変身』と諷刺』はジョン・ハリントンの『エイジャックスの変身』におけるスカトロジカルな風刺と同一人物による新たなテクノロジー(水洗トイレ)宣伝との興味深い関連性を議論の導入部として、1599年の「主教焚書令」の対象となった一連の諷刺作品を幅広く引用しながらこの諷刺詩の歴史的なコンテクストを明らかにしていく。大島範子「貞淑な妻の申し開き——ダヴェナントの『ロードス島攻囲』(1656)における捕囚と変節」は護国卿時代に上演された例外的な劇作品を対象とし、政治的変節と宗教的変節(改宗)というこの時期ならではのトピックに着目して日本シェイクスピア協会若手奨励賞を受賞した。

日本シェイクスピア協会の英語版学術誌 *Shakespeare Studies* は当該年度に第55号

を発刊し、以下の二点を収録している——François Laroque, “‘Nature’s bastards’: The Hybridity of *The Winter’s Tale*”; Sophie Chiari, “‘May the winds blow till they have wakened death’: Othello to the Last Breath”. 同号の Book Reviews には Miki Nakamura (中村未樹), Rin Kunizaki (國崎倫), Yuko Sugiura (杉浦裕子), Mikiko Nishihara (西原幹子), Performance Reviews に Tetsuhito Motoyama (本山哲人), Andrew Eglington, Angela Kikue Davenport の各氏が寄稿している。

日本英文學會の学会誌英文号 *Studies in English Literature*, English Number 59 に Yuichi Tsukada, “*Antony and Cleopatra* and the Politics of Representing Elizabeth I in Jacobean England” が掲載され、アントニーとクレオパトラの人物造形におけるシェイクスピア劇の特異点をポスト・エリザベス時代の政治的コンテクストから生まれる新たなエリザベス・カルトの視点から解き明かしている。クレオパトラ表象をめぐる第4節のテキスト分析が緻密かつ繊細で、作品解釈の一つのやり方として参考になる。

日本英文學會『英文学研究支部統合号』第十巻には初期近代イングランド文学関連として以下の三点の論文が収録されている。『東北英文学研究』第8号では佐々木和貴「エリザベス・インチボールドの *Remarks for The British Theatre* で読むシェイクスピア」が19世紀初めの劇作家兼劇評家エリザベス・インチボールドに脚光をあて、その「短評 (remarks)」が劇評という新たな文化的・商業的コンテンツの先駆けになる興味深い現象を指摘してくれる。1800年前後の時期にイングランドの演劇ビジネスが娯楽文化的に大きく変化していた可能性を示唆するばかりでなく、今日のシェイクスピア研究者に課せられる命題、すなわち演劇テキストとしてのシェイクスピアの面白さとお芝居としての面白さをどう両立させて論じるかという課題を改めて意識させてくれる好論文。『関西英文学研究』第11号には塚田雄一の英語論文“‘It makes him, and it mars him’: Heroic Masculinity in *Macbeth*”がジェームズ一世の王権プロパガンダを接線にとり、『マクベス』の各登場人物に投影される生殖性 (生殖能力) 表象の揺らぎに注目する。『九州英文学研究』第34号は懲憑論文として村里好俊「恋愛ソネット連作集の伝統と軌跡——3Sの連作ソネット詩集の独自性について」を掲載し、同論はシドニー、スペンサー、シェイクスピア、メアリ・ロウスの恋愛詩集を取り上げ、それぞれの特性を簡潔、明快に指摘している。

日本英文学会 (関東支部) 編『教室の英文学』(研究社, 2017年5月) は大学教育において「英文学」研究が果たしうる役割と領域を31名の英文学研究者が提言した論集であり、シェイクスピアと演劇関連では以下の二点が収録されている——岩田美喜「表象文化 (演劇) を教える——芝居の難しさと面白さ」; 井出新「シェイクスピアの教室——作品との対話を深めるために」。村里好俊編『女性・ことば・表象——ジェンダー論の地平』熊本県立大学文学部論叢 I (大阪教育図書, 2017年9月) は女性という切り

シェイクスピアの研究

口から論じる8点の論考を掲載し、初期近代イングランド文学関連として村里好俊「シドニーとメアリ・ロウスの作品にみられる女性表象」が収録されている。

川成洋・吉岡栄一・伊澤東一編『英米文学に描かれた時代と社会——シェイクスピアからコンラッド、ソロー』(悠光堂, 2017年12月)は「構築の会」を中心とするメンバーにより三～四年ごとに刊行される論文集であり、三冊目にあたるこの巻ではシェイクスピア(時代)関連として以下の4本を収録し、それぞれの論考が独自の視点から文学作品とシェイクスピア時代の社会文化背景との関連性を検証している——チャールズ・モウズリー「シェイクスピアのヒパクリット(役者)」; 伊澤東一「飛び入り——『夏の夜の夢』の多様性」; 須田篤也「相違する理想的統治者像——ジョン・リリー『キャンパスピ』と『サッフオーとファオ』考察」; 藤本昌司「イギリス紳士と騎士道精神——その体現者たちの群像」。

大学紀要などの学術誌に掲載された論文には以下のものがある(姓名の50音順)——石塚倫子「神秘の薬草マンドレイク——『ロミオとジュリエット』における眠り薬」, 東京家政大学人文学部英語英文学会『英語英文学研究』第23号; 太田一昭「ジョナサン・ホープの作者同定研究の功罪」, 九州大学大学院言語文化研究院『言語文化論究』No.40; 勝山貴之「グローバル交易と『間違いの喜劇』」, 同志社大学英文学会『主流』第79号; 勝山貴之「『じゃじゃ馬馴らし(*The Taming of the Shrew*)』と当世風の結婚——16・17世紀のグローバル交易とロンドンの物質文化」, 『同志社大学英語英文学研究』第98号; 勝山貴之「トマス・デカーのパンフレットを読む——大都市ロンドンの繁栄と墮落」(研究ノート), 『同志社大学英語英文学研究』第99号; 近藤直樹「アフラ・ベンの *The Widow Ranter*——悲喜劇の構造について」, 大阪府立大学人間社会システム科学研究科『言語文化学研究 英米言語文化編』第13号; 近藤弘幸「文明/未開」と「原典/翻案」——坪内逍遙の宇田川文海評価と日本のシェイクスピア受容」, 中央大学人文科学研究所『人文研紀要』第88号; 田中雅男「ディケンズとシェイクスピア三百年祭——アンドリュー・ハリディの戯文から読み解く」, 神戸大学英米学会『教養主義の残照——*Kobe Miscellany* 終刊記念論集」; 堤裕美子「*The Merchant of Venice* 再読——人肉裁判の法廷で男装のPortiaが説く「慈悲」の意味」, 『サイコアナリティカル英文学論叢——英語・英米文学の精神分析的な研究』第38号; 鶴田学「エリザベス朝演劇における魂の溶解と輪廻転生説」, 『福岡大学人文論叢』第49巻第4号(通巻195号); 中野春夫「シェイクスピア劇の小唄の特性とコンヴェンション」, 学習院大学文学部『研究年報』第64輯; 福士航「主人公は誰だ?: 『オセロ』を読む」, 『東北学院大学論集』No.102; 正岡和恵「イギリス・ルネサンス期の翻訳——最近の研究から」, 『成蹊英語英文学研究』第22号; 由井哲哉「シェイクスピアの空間的想像力」, 『フェリス女学院大学文学部紀要』第53号。

本年度の大学紀要, 大学英文学会機関誌における英語論文は以下の通りである(姓

回顧と展望

名のアルファベット順)——Hanako Endo, “Bloodletting and the Control of Passion in Shakespeare’s *Julius Caesar*,” アレーテシア文学研究会『アレーテシア』第32号終刊号; Kazuko Mariko, “Catholic Movements, Essex’s Political Cause and the Composition of Shakespeare’s *All’s Well That Ends Well*”, *Reading* (Tokyo University) Vol. 38.

翻訳関連では河合祥一郎の『新訳まちがいの喜劇』(KADOKAWA, 2017年6月)が角川文庫版の9作目として出版された。脚韻を視覚的に示す工夫がいつもながら新鮮である。また研究書の翻訳としてハーリー・グランヴィル＝パーカー『王政復古期のイギリス演劇とは何だったのか——ウイッチャリーとドライデン』間晃郎・小野正和訳述(玄文社, 2017年4月)が原著の翻訳に加えて、詳しい註釈とグランヴィル＝パーカーの上演年表も付されて刊行された。同じくハーリー・グランヴィル＝パーカーの『シェイクスピア・優秀な劇作家から偉大な劇作家へ——その一大転換点のありかはどこか』大井邦雄訳述(玄文社, 2017年11月)が訳者の網羅的な註釈と解説を通じてシェイクスピアの劇作術の特性を具体的に分かりやすく伝えてくれる。ジェイムズ・シャピロ『リア王の時代——一六〇六年のシェイクスピア』河合祥一郎訳(白水社, 2018年2月)は1599: *A Year in the Life of William Shakespeare* (2005)の姉妹版にあたる研究書であり、1606年という激動の一年の面白さを余すことなく伝えてくれる。同書が受けた激しい批判にも配慮した訳注がみごとである。

(学習院大学教授)